

色彩の象徴性・再考

——ターナーの色彩論をふりかえって——

吉 田 憲 司

-
- | | |
|---------------------|--------------------|
| 1. はじめに | 4. 色彩は「象徴的意味」をにうるか |
| 2. ターナーの色彩象徴論 | 5. 色彩の認識論的機能 |
| 3. ターナーの議論における問題の所在 | |
-

論文要旨

人類学者はこれまで、儀礼に用いられた色彩を「象徴」とみ、その意味を抽出するのに多くの労力をさいてきた。しかし、色が、そのついでに物に属するのではなく、それとは別の何かを「意味する」「象徴する」というとき、そこにはただちにいくつかの問題が生じてくる。たとえば、「葬儀の場で用いられる黒は死を意味する」というとき、まず、誰がそのように言明するのかという疑問が浮かぶ。その葬儀の参加者だろうか。それとも研究者だろうか。「象徴」とおぼしきものが使用されている場にとって、その意味を問うとき、われわれがしばしば出合うのは「それが慣習だ」といった答えであろう。「象徴」の意味を知らずに「象徴」が実際に機能しているとするならば、端的に言って、「象徴」の機能は意味作用にならないのではないか。

この小論では、アフリカのンデング社会の儀礼を対象として色彩の象徴性についての意味論的・記号論的探求に先鞭をつけたヴィクター・ターナーの研究を、ダン・スベルベルの議論に依拠しながら再検討する。そしてそれを通じて、儀礼のなかでの色彩が、人びとの固定したメッセージを伝えるのではなく、むしろ人びとが当面する状況を相互に関係づけ、人びとの経験を組織化する手段になっていることを論じる。